
朗読会

大森ろら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

朗読会

【Nコード】

N58910

【作者名】

大森ろら

【あらすじ】

朗読会からはじまる不思議な物語。ガーデンパーティ、藤棚、図書館、本屋、古本屋……。本をめぐる僕の不思議な体験。

あの世とこの世を行き来するなかで体験する甘美な本をめぐる物語。

【注意】この作品は私の個人サイトでも公開しています。

<http://rorra.ikidane.com/>

幸介はコートのポケットから四つに折りたたんだちらしを取り出してもう一度確認した。

やっぱりここでまちがない

すでに日は落ちていて、ホールへとつづく道は外灯で照らされている。

なんでほかに歩いているひとがないんだろう？

しかし一步ホールに足を踏み入れてみると真つ白な大理石の床の豪華なロビーにはかなりの人数の人間がひしめいていた。

コートを脱ぎながら、さてどこへ行けばいいのかとまわりをみまわしていると、どこからか青いスーツ姿の若い女性がかつかつと靴音を響かせながら近づいてきて彼が手にしているちらしをのぞきこみ、「Aの5になります。あちらにあるポインセチアの左側の通路をまっすぐ行つたつきあたりです」と言つてまたかつかつと靴音をたてながら、いま入り口からはいつてきた白髪の老人のほうへと歩いていった。

多少面食らつたものの彼は言われたとおりに大きなポインセチアの鉢植えがあるほうへ歩いていった。たしかに（小ホール）と書かれた案内の矢印は右側の通路を示しており、（集会室）と書かれた矢印は左側をむいている。左側の通路を歩いていくとつきあたりの部屋の扉に（Aの5）とあった。その扉はすこしあいていて、中からひとの話し声がかきこえてくる。そつとのぞいてみると、十五人ぐらいが半円形に並べられた椅子に腰をおろしていた。ざっとみまわして、まず本多の姿がないことに気がついた。

本多守は彼が朗読会に通うきっかけをつくつた男だ。高校の同級生で、幸介のパソコンの教師でもある。読書という共通の趣味をもつていて、ときおりこの本良かったよとか、あの本はもう読んだ？などとメールのやりとりをしている。この会はもとと本多の知

り合いの知り合いとでもいうべきひとが主宰しているもので、本多に誘われて半年前から月に一度の割合で参加するようになった。

日本橋にある喫茶店で第一、第三金曜日の夜にひらかれるこの朗読会では毎回、一度に読みきれぬ短篇をひとつかふたつ、とりあげる。前回はカポティの「ミリアム」と「クリスマス思い出」をやった。朗読をしたのは山下という、舞台俳優をしている三十代前半の男だった。あのとき本多は彼のとなりで椅子の背にもたれながらかるく握った両手をおなかのあたりににおいて目を閉じ、朗読に聞き入っていた。

幸介はあいていたうしろのほうの椅子に腰をおろして腕時計で時刻をみた。そろそろはじまる時間だ。と、すこしあいていた扉が閉まってあかりが落ちた。前にひとつだけぼつんとおかれた椅子にはまだ朗読者の姿はない。たぶん山下さんは現れないのだろうなと彼はおもった。まわりをそつとみまわしてみても見知った顔がひとつもない。今回は場所も違うし、これは別の主催者による朗読会なんだろう。だから本多もないのだ。

彼はちらしをたしかめようと鞆をさぐったが、その音がやけに大きく響いたのでおどろいた。いつのまにか周囲の話し声はやんでも静かになっている。彼は目をこらした。

『城』 フランツ・カフカ作 朗読／相沢イツコ

『城』は十代の終わりに読んでやけに感激した覚えのある作品だ。しかしそれ以来一度も読み返していない。

いつそう暗闇が深くなった気がして顔をあげると朗読者がちいさなスポットライトのなかにいて今日はほんとに冷えますけれどもみなさんお風邪などひいておられませんかと語りかけていた。朗読者の椅子はほかのみんなの椅子よりも高くつくられているようで、そこに座った朗読者の顔がよくみてとれる。まだ二十代なかばぐらいの髪の長い女性だ。すこし頭を傾けると人々の隙間から黒いタートル

ネックのニットにジーンズをはいている姿がみえた。耳にオパールのような小さなピアスをつけている。

「つめたいものが空からふりだしそうなので、さっそくはじめることにいたします」

幸介はいつの間にか目をとじていた。本多のようにおなかに手をおいて体を背もたれに預ける。部屋は寒くもなく暑くもなくちょうどいいぐらいだった。もしもうすこし暖かければすぐさまとろりとした眠りに引きずりこまれていただろう。

朗読者はまるで夜眠る前にベッドのなかでそつとページをめくっているかのような親密な感じの朗読をした。どちらかというと抑揚のすくない小さな声はしかし、耳元で囁いているかのようにはつきりと聞き取ることができた。

彼は、昔、自分の部屋で『城』を読んでいたときのことをおもいだした。微小な白い虫がはいまわっているような古い世界全集が家があり、彼はその夏それらをすべて読もうと心にきめていた。『城』はそのなかの一冊だった。はじめのほうは一頁読み終えるのにもたいへんな苦労を感じた。彼はしおりひもを人差し指の先にまきつけながらのろろと読みすすめていき、ときおり残りの頁の厚さを指ではさんで確かめたりした。とにかくひどい暑さで、部屋にもつてきた飲み物のグラスが彼以上にだらだらと汗をかいていた。氷は十数秒できれいにとけてなくなり、グラスの表面はくもり硝子のようにになった。

朗読が終わると部屋はあかるくなり、人々は窓際にあつまって暗い窓の外を白いものがゆつくりとはしっていくのをながめた。彼も人々のうしろから背伸びをして雪をみつめた。

このひとたちが飽きるまでここでこうしていよう、と彼はおもった。帰りもあの道をひとりで歩きたくはなかったから。

長いこと芝生のうえに寝転がって待っていた。

やっとちらほらひとが集まってきたぐらいで、まだはじまるのに
はだいぶ時間がかかりそうだ。はおつてきた上着は暑くて脱いでし
まつていまは枕がわりに頭の下でしくちゃになっている。

しばらくして園内というムーンホールの厨房で働いている男がや
つてきて彼の隣に腰をおろした。

かけていた眼鏡をとって白いシャツの裾でレンズをふきはじめる。
彼はカラスの話をはじめた。彼が暮らしているあたりを縄張りとし
ている六羽のカラスが口にくわえた石やガラス瓶の破片を空から通
行人めがけて落とすのだという。

園内はきれいになった眼鏡をかけてハンティング帽をとると、その
てっぺんをじろじろと眺めた。糞がついていないか確かめているの
だ。それから幸介に背中をむけて大丈夫かどうかたずねた。幸介は
よくみてから、大丈夫だ、とうなずいた。

まあ、しかたがないといえはしかたないんだよ、なんせかれらが
棲み処にしていた森がなくなっちゃったんだから、そう、よくある
話さ、ひとがひとり死んで、残された人々がすべてをすっかり変え
てしまう、いまはその森、いろいろい駐車場になっちゃったよ、巨大
で立派な駐車場、その森は冬になるとすっかり葉がおちて、カラス
たちがつくった巣が下から見えてさ、なかなかよかつたんだけどね、
それはもうおつきな立派な巣でさ、うん、残念な話だよ。

幸介はカラスのおおきな巣がある冬の木を想像して、それからむ
かし自分が木登りをしていたころのことをおもいだした。なにしろ
彼のむかしのあだ名は（木登り上手）だった。でも彼よりもっと高
い場所まですると登れる少年がひとりだけいた。彼は（幽霊）
と呼ばれていた。みんなの想像を超えた木登りの達人だったからだ。
彼は裸足でも靴をはいたままでもどちらでも同じようにするする登
った。級友のひとりがのぼり棒から落ちて大怪我をし、それ以来木
登りも禁止されてしまつても彼らふたりだけは隠れて神社の大銀杏
の木に登りつづけた。

幸介は幽霊がするすると上のほうへ消えていくのをじつと下から

見ていた。彼が失敗するおそれは万に一つもなかった。不安にかられたことは一度もなかった。ただ、地上にもどってきた幽霊に上着をかけてやる時だけはいつもその肩の冷たさにどきつとした。それはまるで上空の冷氣をそっくり持ち帰ったかのような特殊な冷たさだった。

おい、と園内が顔をつきだして、幸介の背後を指差した。

「そろそろはじめたほうがよさそうだ」

そこにはみたことのないほど長いテーブルが置かれ、椅子が続々と運ばれてきていた。コック帽をかぶった体格のいい男がこちらにむかつておおきく手招きをしている。慌ててふたりで駆けつけると別の半そでシャツの男が「椅子はもういいから皿を並べてくれ。急いでな」と言つて皿やフォークやナイフやスプーンやグラスなどがどつさりはいったカートを指差した。

すでに大勢の客が椅子に腰をおろしはじめている。あたりは突然にぎやかになつて園内が言っている言葉もききとれない。

「お手伝いしましょう」

横からグラスを手にとつたのは朗読者の彼女だった。咄嗟に名前がでてこない。緑色のフード付きのパーカーにデニムのミニスカートをはいて、髪をピンク色のゴムでひとつにしばっている。

「ほんとに急いでやらないと」

そう言つて彼女は彼の手がとまっていることを指摘する。彼は慌てて皿を置いた。

「なあ、君」とスカーフを首にまいた年配の男性が横から声をかけてくる。「もうみんな席についているようだし、皿やら箸なんかは手渡ししていったほうが早いんじゃないかな」

ああ、そうですね、と彼は男に皿を何枚かまとめて手渡した。テーブルには花をいけた花瓶がおかれ、料理がぞくぞくと並べられている。どうやら厨房で用意したのはあたたかな料理だけで、惣菜やサラダやデザート類、飲み物なんかは参加者がそれぞれ持ち寄ってきているようだ。園内もいつのまにかおいしそうなマリネのような

ものがはいった深皿をだしているし、朗読者の彼女、いまやつと名前をおもいだせたのだが、相沢イツコもガトーショコラらしきものを箱からとりだしてテーブルにおいている。

気づくと彼以外はみんな席についていて、イツコのとなりの席だけがぼつんとあいている。彼がその席に座つてどきどきしながらしわくちやの上着を椅子の背にかけようとすると、ポケットから不恰好に飛び出している瓶が椅子にごつんとあたった。取り出してみるとそれはウォッカで、それをみたイツコが「わたしがウォッカに目がないこととしてたの？」と満面の笑みをうかべて瓶を手にとり、テーブルの、彼女と彼の間においた。

幸介はようやくほつとして参加者を見まわし、やはり本多の姿がないことに気づいた。

どうかしたの、とイツコがたずねる。

「友達の姿がみえないんだ」

「なんていうひと？」

「本多守」

しかし彼には本多に声をかけたかどうかが判然としなかった。もしかするとすっかり忘れていたかもしれない。

「ホンダマモルさん……」イツコはあごに手をやった。「わたしの友達にもね、すこしまえから姿を見せなくなってしまったひとがいるの。スドウミクさんといってわたしの前に朗読をひきうけていたひとただけだ」

「そうなんだ」

「ええ。彼女の朗読はとてもすばしかったのよ。あなたも聞けたらよかったのに」

「でもぼくはきみの朗読で充分満足してるよ」

「ほんとう？ 実はまったく自信がないの」

「いい朗読だよ。ぼくはすきだな」

イツコはにつこりわらうと彼の肩をつつき、背後の林を指差した。それからテーブル上の食べ物をもつとナプキンにつつんでポケット

におしこみはじめる。彼もそれにならった。そしてウォツカの瓶とグラスをふたつもってふたりは席をたち、ぶらぶらと林のほうへと歩いていった。

藤棚の下からひとびとが散ってしまったあとで、幸介はベンチから腰をあげてちいさな太鼓橋の上から池をみおろした。おおきなうつくしい鯉たちがわらわらと近寄ってくる。そのなかでも白い肌に金の砂をまぶしたかのような鯉がほかのものがいなくなったあとでもしばらく橋の下にとどまって口をぽっかりあいている。彼は上着のポケットに手をいれて、底にあつたなにかをとりだしてみた。ビスケットのかけらだ。ぼとんと池に落とすとかけらはしずかに落ちていき、きれいな鯉もいっしょに沈んでいった。

本多とは連絡をまだとっていない。園内もここ数回、朗読会に現れていない。

幸介は朱塗りの欄干をこんこんと手の甲で叩いて鯉を呼びもとそうとしたけれど鯉は沈んだままかそれとも別の場所へ移動してしまったのか姿を現さない。ポケットをさぐってみると、ビスケットのかわりに紙切れが出てきた。そこには本の題名が連ねてある。いくつか読もうとおもっていた本のリストだなと彼はおもった。

そういえば本屋と古本屋と図書館がひとつになった便利な建物が近くに出来たんだったと彼はおもいだした。おぼろげな記憶をたよりに神社を出て歩き出すと、五分ほどで真新しい巨大なレンガの建物をみつけた。

案内の看板があつて、図書館は外階段を一階分あがつたところからも入れるとある。広々とした外階段をあがると立派なオレンジ色の花が咲いたアロエの花壇がまず目にはいった。入り口の自動ドアを通りぬけると、わっと視界がひらける。フロア全体が一望できる。ふつつの図書館や書店にあるような高い書棚はひとつもなく、大人の背丈ほどの高さの棚に本が並べられている。床には分厚い絨毯が

ひかれ、人々の足音を漏れなくすいつている。

彼はまっすぐ貸し出しカウンターに行くと、そこにいた若い女性に目当ての本がある場所をたずねた。女性はパソコンでかちゃかちゃと検索をしたあと、図書館内の地図を一枚とりだして探している本がある場所にオレンジ色のペンで丁寧に印をつけてくれた。ありがとう、と幸介は礼をいうとそこから一番近い印の場所へむかった。かすかにコーヒーの香りがする。見上げると上のフロアで紙コップを手にしたひとが数人透明のガラスのむこうからこちらをみおろしている。コーヒーもいけれど、とりあえず本を探してしまおうとおしえてもらった棚から次々に目当ての本をみつめて胸に抱えこんでいった。全部揃うと、カウンターに戻ってカードを作り、さっき本の在り処を教えてくれた女性にもう一度礼をいって、さっきとは別の出入り口から外に出た。

そこもまだ建物のなかだった。目の前に書店の入り口がある。そのままはいつていくとリストをもう一度ひらいて、今度はぶらぶらと店内を歩きはじめた。はじめての図書館にくらべれば、はじめてはいる書店のほうがなんとなく本をさがしやすい気がする。

リストに水色の字で書かれている小説の新書を二冊みつけたあと、海外小説の棚へいった。はしからはしまでみてみたけれど、欲しい本がどうしてもみつからない。ちょうど段ボール箱を抱えて通りかかった店員を気の毒だとはおもいながら引き止めてたずねると、ああ、それはたしか絶版になってるとおもいますよという。「今調べてみます」というので手近にあった本を開いて待っていると、早足で戻ってきた店員が「やっぱり絶版でした。品切れというわけではないんですよ」とおしえてくれた。ああそうでしたか、と残念な声をもらすと、「古本屋なら扱ってるところをみかけたことがありますから、ためしにのぞいてみたらどうですか」と励ますようにいわれた。

その店員に丁寧な礼を言っただけで会計場所に歩いていくと、やけに混んでいて列ができています。

最後尾の男性のあとにつくと彼は本を開いた。最初の数行で胸がどきどきしてきた。これは家に帰ってからゆつくり読むべき小説だ、とおもい、本を閉じた。顔をあげるとちょうど前に並んでいた男性の横顔が目にはいった。

「とうさん」幸介はおどろいた声をあげた。

男はふりかえって彼を見た。

「お」

ふたりはお互いが手にもっている本をちらつと見た。幸介の父親は外国語の辞書のようなものをもっている。

「そういえば辞書がぼろぼろになってたね」

「ああ。なるべく似たようなものをさがしてみただけど、これならいいだろう」

「よさそうだよ」

「ここにはよく来るのか？」

「いや、はじめて」

父親は彼の手から本をとると、自分のものと一緒にレジにだして会計をすました。

「じゃあ、またここで会うことがあるかもな」

「そうだね。これ、ありがとう」

父親は自分の辞書の包みを手にすると軽く手をあげて去っていった。

彼は書店を出ると古本屋をさがした。古本屋は建物の地下にあった。地下のフロア、すべてが古本屋だ。ここならなんでもあるに違いないと幸介は期待した。

早速、絶版だと言われた本があるかどうかを近くにいた年配の店員にたずねてみた。店員はすぐさまそれならちょうど今一冊ありますよとこたえた。絶版だとやっぱり高いんですね、とすこし不安になった幸介がたずねると、店員はいいやと首を横にふった。

「定価よりすこし高いぐらいですよ。うちは良心的にやってるんで法外な値段は滅多なことではつけやしません。大丈夫ですよ」

親切にも彼は本がある場所まで幸介を案内して、棚から丁寧にとりだして手渡してくれた。

「この本はいい本ですよ。なんで絶版になったのか訳がわからない」と店員は言った。「もし手放すときはまたうちに来てくださいね。ほかの本も歓迎します」

わかりました、ありがとうといって彼はレジカウスターのあるほうへ歩いていった。店内は薄暗くて広くて見渡す限りぎっしりと本が詰まっっていて、いかにも掘り出し物がたくさん眠っていそうだが、でもじっくり見てまわるのはまたにしよう和幸福はおもった。たのしみがまたひとつふえた。

と、通り過ぎようとした棚の文庫に目がとまった。イツコがまえにすきだと言っていた宮沢賢治の本だ。どんぐりが出てくる短篇がはいっているもの。ひらいてみるとかわいい挿絵がついていて、きつと彼女はこれが気に入るだろうとおもった。それでそれもいっしょにレジカウスターにもっていった。

この文庫、別に包んでももらえますかね、と若い店員にたずねてみると、贈り物ですかと訊き返された。ええ、とこたええると、うちはラッピング無料ですからと薄茶の薄紙に手早く包んで黄色いリボンを結んでくれた。

よかったとおもいながら受け取ろうと手を伸ばしたとき、はしつと店員がその手をつかんだ。おどろいて顔をあげると、ざわめきが周囲で起こり、いくつかの手が同時に彼の体に触れたのが感じられた。どこかに横になっっているのか、上からのぞきこんでいるいくつかの顔が彼の名前を呼んだり、話しかけたりしている。声を出そうとしてみるのだけれどうまくいかない。ぼんやりした顔のひとつは本多に似てみえた。泣いているのだろうか。顔がくしゃくしゃにゆがんでいる。やがてだれかが彼の体をつよく揺さぶりはじめた。彼はそれを感じた。とてもつよい。つよいままそれが、ゆっくりと彼のなかから遠ざかっていくのを彼は感じた。

何度か目を瞬くと、そこにはイツコがいた。彼のことをじっとみ

つめている。彼女の両手は本を支え、暗がりのなかから周囲の人々のしずかな息づかいがそっと伝わってくる。

彼がちいさくうなずくと、彼女は頁をめくり、そっと息を吸い込んだ。

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5891o/>

朗読会

2011年5月11日19時40分発行